シルエット

Ｙ Ｊ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シルエット

【Ｎコード】
Ｎ５０６３Ｅ

【作者名】
ＹＪ

【あらすじ】
かつて天界の神々は反逆した天使達を人間界へ追放した。地上へ落とされた天使は堕天使と呼ばれ、次第に人間達に悪行を広めていった。人々は堕落し、堕天使達は、やがて悪魔と呼ばれるようになった。人間の力は非常に弱く、悪魔に抵抗する力はなかった。だがそこへ一人の男が現れた。

プロローグ

仮想中世ヨーロッパ。
人々の暮らしは堕落していた。
その昔、天界では天使の身でありながら高慢、嫉妬、自由意志などの理由で神に反逆し、その結果、天界を追放された天使達がいた。それら堕天使はグリゴリと呼ばれ、それまで人間に禁じられていた知識、呪術、薬草、鉄加工、化粧、占星術などの知識を人間に伝えた。それによって男は武器で争う事を、女は化粧で男に媚を売る事を覚え、地上には、その他さまざまな欲情がはびこるようになったという。
悪徳を広めるグリゴリ（堕天使）は、その後、悪魔と呼ばれるようになった。人々の暮しから遠ざけられる存在となったが、その陰では悪魔を崇拝し、自分の私利私欲のためだけに更なる悪魔を召喚する者も現れた。人間の力はあまりにも弱く、日増しに犠牲者を増やした。悪魔に対抗するすべを持てずに人々は途方にくれていった。だがそこに、一人の男が現れた。その男の名はレヴェルという名であった。

プロローグ（後書き）

まだ話は始まってませんが、暇があればチョイチョイ書いていこうと思っていますので、よろしかったら末長くお付き合いしてやってください。

愛の涙は黒く染められた　1

街はどんよりと薄暗い雲に包まれていた。今に始まったことではない。街は悪魔や悪霊の噂話が絶えず話されていた。そのためか修道の道へ進む者も多く、ローブ姿が多く目につく。

いつからか人々は俯きかげんになり、街の活気は失われていた。

レンガ造りや木造などの家が建ち並び、足元は石畳で綺麗に整理されている。もっぱらこの時代、移動手段としては馬やら馬車が利用されているが、それも金持ち貴族と限られていた。　街並みに目を移すと、若い男女が視界に入ってきた。

「ウェナン、いってらっしゃい」

彼女の名はエトナ、先日ウェナンという青年と結婚したばかりだ。

「ああ、いってくるよ」

誰もがうらやむ様な美男美女の二人、玄関先で二人は軽くキスを交わすと、ウェナンは仕事へ出かけていった。彼は大工の仕事をしていた。まだ新米で材料を運ぶのが主な仕事となっている。

いつもと同じ、今までの毎日となんら変わらぬ一日の平和な風景……。のはずであった。

数時間後、エトナは家事を終えると、昼食の買い物へ出かけた。だが、いつもとは違う街の雰囲気を敏感に感じた。店の前で人々がざわざわと慌ただしくしているのが目に入った。

「エトナ！　エトナ！」

親しくしている婦人の一人が彼女を大声で呼んだ。何事かと思い、彼女もすぐに駆け寄った。

「ウェナンが……、木材の下敷きに……」

「え！！……」

状況が把握できずに立ち尽くす彼女の目の前で婦人はその場に泣き崩れた。彼女は婦人の肩をやさしく抱き寄せた。

「ウェナンは……、ウェナンはどこに？」

「病院へ運ばれたそうよ……」
彼女は買い物籠を放り投げるようにして、無心で病院へ走り出していた。
「ウェナン……。ウェナーン！……いやーー！」
彼女の叫びは街に響き渡っていた。エトナは病院へ着くと急いでウェナンのもとへと駆け寄った。医師はただただ首を横へ振るばかり、手の施し様はないと、その仕草は語っている。
「いやよ！　ウェナン！　ウェナン！」
彼女は激しくウェナンの体をゆすった。ウェナンはかろうじて生きてはいるが、苦しそうに冷や汗を流すばかりだった。
「先生！　ウェナンは？助かるんですよね？」
「申し訳ないが……、そんなに長くはないだろう。明日まで生きているかどうかさえ……」
医師は残念そうに首をうな垂れさせ首を横にふると、静かにその場から姿を消した。
「いやよ！　ウェナン、私を置いていかないで！」
エトナは薄暗い病室に一人残されると、ウェナンの両手をかたく握り、何時間も神へ祈り続けた。彼女の祈りが届いたのか否か、そこへローブ姿の人影が姿を現した。頭からフードをかぶり、病室の暗さもあってからか、その表情はうかがい知れない。
「私はサブナクと申すもの。エトナよ、その男の命は消えかけておる。もう少しすれば、完全に消える運命。それでもなお、神へ祈り続けるおつもりか？　もし神がおられるのであれば、そなたの祈りは届いておられるはず、神はそなたの祈りを叶えるおつもりはないと見える。それでもなお、お前は、愚かな神を信じるおつもりか？　そんなそなたもまた愚かな生き物であろう……」
太く低い声が、エトナの心の深くに響き沈んでいった。
「私には頼れるものがないのです。こうなってしまっては、神に祈るしかありません」
エトナはサブナクへ涙ながらに声を震わせた。

「ならば、私を信じるが良い。ウェナンの魂を呼び戻して見せよう」

そう言うと、男は地に響くような低い声で不気味に笑った。彼女はためらいながらも軽く頷いた。それを確認するや否やサブナクはエトナの手を乱暴に払い除けた。サブナクと名乗るその男はウェナンの胸から腹の辺りに両手をあてると、ぶつぶつと呪文のような言葉を呟き始めた。エトナは尻餅をついた格好でその光景をくいるように見守った。しばらくするとサブナクはウェナンから両手を離した。

「明日は死んだように眠ったままだが、明後日には嘘のように元気になるであろう。ふふふ……」

サブナクは不気味な笑い声を病室に残したまま姿を消した。

「ウェナン……。ウェナン……」

エトナは、またウェナンの両手を握り締め、神への祈りをいつまでも続けていた……。

愛の涙は黒く染められた　2

夜明けの明かりは雲に隠れ、その明るい光を目にすることは許されない。だがエトナの両手は、ウェナンの両手と結ばれ、いつまでも愛の光を明るく灯していた。

「エトナ……　エトナ……」

いつの間にか、エトナは眠っていた。医師の肩を叩く手で、彼女は目を覚ました。夜中に現れたサブナクとの事が現実だったのか夢の出来事であったのか彼女自身、分からなくなっていた。

「エトナ……、残念だがウェナンはもう……」

彼女は分かっていた。自分が触れているウェナンの手からは生気を感じない、心拍もしている様子はない。だが彼女はサブナクの言葉を信じた。

「ウェナンは生きているんです！　明日になれば元気になるんです」

エトナは自分に言い聞かせるように医師に叫んでいた。

「だがエトナ……、彼はもう……」

なんと言われようと彼女は抵抗した。医師に強く反論すると、医師も諦めてその場を離れていった。

「ウェナン……」

涙ながらに強くウェナンの両手を包み込む。冷たい彼の手を感じると、希望が薄れていった。そう感じる自分自身も嫌で、彼女の涙は枯渇する事を忘れ、いつまでも流れ続けた。時折、病室を通り過ぎる人々からの悲哀な声もエトナは背中で感じて涙していた。

――――――――――――

翌朝。

ウェナンは目を覚ました。サブナクが言ったように生き返ったの

だった。だが、その様子は以前とは違っていた。肌はどす黒く変色し、苦しそうに言葉を話せないでいる。
「ぶ……　ヴェ……　ド……　ダ……」
「そう！　そうよエトナよ！　ウェナン」
彼女は嬉しそうにはしゃいでいたが、それとは裏腹に彼女に近寄る者は誰一人としていなかった。死者が蘇ったのだと人々は噂した。そんな声を尻目に彼女はウェナンを抱き寄せた。彼は自分で歩く事もままならずに、エトナに肩を抱かれて家へ帰っていった。人々は不気味なものを見るような目で見つめ、道をあけた。
ふと見上げると、空はいつの間にか雲が濃くなり、雨を降らせている。
「ぶ……　げ……　が……」
「はいはい、今作りますからね」
彼の言葉は人間のものではなくなっていた。食事をするのも食器を使わずに素手でむさぼる。そんな時、突然ドアを叩く音が部屋に響いた。
『トントン！トントン！』
「ちょっと、お邪魔するよ」
彼女の家へ現れたのは一人の男だった。白い肌に金色の髪、青い目のとても整った顔立ち。マント姿の男だった。彼の名はレヴェル。一見、この街に似合わぬ姿をしていた。
「ちょっと……」
彼女がドアを開けるとレヴェルはズカズカと中へ入っていった。
「こいつか！？」
レヴェルはウェナンの前に立った。マントを翻すと、すかさず銀色に光る右拳をウェナンの顔面に喰らわせた。レヴェルは銀を皮に染み込ませた手袋を着けている。銀は魔を近づけないと信じられているからだった。ウェナンはそのまま力なく椅子から転げ落ちていった。
「やめて！」

「邪魔だ！」
レヴェルはエトナを払いのけた。
「この男は人間ではない！　お前も気付いているはずだ！　現実を見ろ！」
その言葉がエトナの胸に刺さり、彼女は現実から目を背ける様に俯いた。
そこへ、物音一つ立てずにローブ姿の人影が姿を現した。サブナクだ。
「彼女の邪魔をしないでいただきたい、私はこの女の望みを叶えただけ、彼女はさぞかし幸せを感じている事であろう。その男の命を救うために祈り続けていたのだから。その気持ちを、そなたは理解できるのか？」
「そんなもん理解できるかよ！　気持ち悪いんだよ！　この悪魔どもが！！」
レヴェルはサブナクへ向かって言葉を吐き捨てた。するとサブナクの両手はフードにかかった。サブナクがゆっくりフードをめくり上げると、そこに現れたのはライオンの顔だった。
「ふふふ……　姿を現したな化け物が！」
レヴェルはサブナクへ飛び掛かり、馬乗りになった。
『ブシッ！ブシッ！』
「ぐげ……　ぶげ……」
レヴェルの右拳はサブナクの顔面を何度もとらえて離さない。サブナクの奇声が漏れる。次第にライオンの顔が変形し、黒い血を噴出し始めた。
「地獄へ落ちろ！　堕天使めが！」
レヴェルは言葉を吐き捨てた。
「そんな事をしても無駄だ。人間の欲望がなくならない限り、私はまた召喚され、人間の前に現れることになるであろう。下等な人間による偽善にも似つかない自分勝手な美徳により何度も蘇る」
サブナクは血を顔面から噴出しながら平然と語った。大量の血が

床一面に広がった。どす黒い血が床に染み込むのと一緒にサブナクはその姿を消していった。
「いいだろう、蘇るたびに俺様が地獄へ送ってやる」
レヴェルは床を見つめて呟いた。すっと立ち上がると、背中越しにエトナに語り始めた。
「辛い現実にぶつかる度に人間は強さを試される。現実から逃げる事ではなく、現実を受け入れる力を人間は持っている。そうやって人は強くなっていく。彼の死を受け入れて、それを乗り越えて強く生きていくんだ！　エトナ、君にはきっと明るい未来が待ってるよ」
それが出来ない人間は人間ではいられなくなる。
レヴェルはマントを翻し、姿を消した。

盗まれた心は悪しき闇に沈みゆく　1

街は貧富の差がひどく、もともとの生まれが貧しいものは、ただそれだけで差別され、軽蔑されていた。

「くそ！　またか……」

ここにもまた不当な扱いを受ける一人の若者がいた。若者の名はアル、今日もまた働き口を探したが、身分を差別されて断られたのだ。彼は焦っていた。唯一の家族である父親が病気で、薬を買うためにどうしても金銭が必要だった。彼の母親は彼が幼い頃に病気で亡くなっていた。その頃、薬を買うお金が無く、母親は病気にかかると、その数日後に命を亡くしていた。もう二度とそんな事は繰り返したくはなかった。そんな彼が頼っていたのは、いつも友人レッドのところとなってしまっていた。

「レッド……　また頼めるか？……」

「俺のとこも苦しいけど、お前のとこよりはまだましだからな。ほらよ」

アルはレッドの顔色をうかがう様に頼んだがそんなことにはお構いなしにレッドは快く金銭を手渡した。

「困った時は助け合うもんなんだよ。アル、俺が困った時には助けてくれよ」

「いつもありがとう、レッド」

レッドのやさしさはアルの心に染み渡っていた。それとは裏腹にアルの焦りは増すばかりだった。そんなある日、暗い裏通りを通り過ぎようとしたアルの前に奇妙な生物が姿を現した。ロバの頭、ガチョウの脚、ウサギの尻尾をもったこれまでアルの目にしたことのない生き物だった。

「奇劇者の方ですか？」

すっかりアルは作り物だと思っていた。無理もない、こんな生き

物が存在する方がどうかしているからだ。だが、その生き物は作り物の動きをしていなかったことにアルはひどく驚き、腰を抜かした。
「アル……」
化け物はそのロバの口を器用に動かし、自分の名を呼んだのをアルは確かに耳で聞き、目で見た。到底理解できぬ状況にアルは肝を冷やした。
「アル、薬が欲しいんだろ？」
化け物の言葉に、アルは無言で首を縦に振った。今の彼にはその動きだけで精一杯だった。
「アル、簡単な方法を教えてやるよ。盗むんだよ、簡単だろ？盗み方は俺が教えてやるよ」
アルは無言で首を横に振った。
「なんだ、期待外れだったな……　じゃあなアル」
化け物は振り返るとその不気味な姿を暗闇へ消していった。

―――――――――――――――

「レッドー！　レッドー！　化け物見たー！！」
アルは慌ててレッドのところへ行き、さっき見た化け物のことを事細かに話した。だが案の定、誰もアルの話しを信じる者はいなかった。
「ほんとなんだってさぁー、信じてくれよー」
「そんなの信じれるわけないだろ、まんまと騙されたんだよ。きっとどっかの金持ちが影で笑ってら」
親友のレッドでさえ、アルの話を信じようとはしなかった。
だが数日後、その化け物は再びアルの前に姿を現した。アルに盗みの話を持ちかけては、アルはそれを拒否する。その後、何度となくアルの前に姿を現すようになっていった。
「ほんとなんだって！　また出てきたんだよー！」
「だから、そんなのは金持ちの暇つぶしだって」

化け物に出くわすたびに事の全てをレッドに話したが、レッドはまともに聞く耳を持っていなかった。それどころかレッドの口から思いもよらない事を言われることとなる。

「そんな話よりもさ、実は俺の家もやばいことになって余裕がないんだ……。すまないがもう金を渡す事はできない……」

「俺の親父はどうなるんだよ！」

「すまないな、アル……」

アルはレッドの胸倉を掴んだ。レッドは無抵抗に首を逸らし、目線を合わせようとしなかった。アルはレッドから手を離すと、肩を落としながら家に帰った。

「親父……　今日は薬を買えなかったんだ……」

「いいんだ俺の事は……　今まで苦労をかけたな。アル、お前は自分の事だけ考えればいい」

「ダメだ！　もう嫌なんだ家族が死ぬのを見るのは！　絶対何とかするから……」

アルは激しく抵抗した。無意識にその頬には涙が伝った。

アルはその翌日も翌々日も仕事を探したが、無残にも断られた。父親の容態は日を増すごとに目に見て悪くなっていくのがわかった。アルは再びレッドに頼みに行くが、そこでもまた断られる。レッドも苦しそうに涙を流し、アルはその姿を見て、何も言えずにうなだれた。その帰り道、ひと気のない薄暗い裏通りで、再び化け物はアルの前に姿を現したのだった。

「アル、薬が欲しいんだろ？」

「ああ、欲しいよ」

これまでの何度とないやり取りで、アルは化け物と普通に会話できるまでになっていた。

「アル、薬を盗む気になったか？」

それまで何の躊躇もなく拒否していた問いにアルの心は揺れていた。

「簡単に出来るのか？」

「アル、俺に任せれば簡単にできるぞ。盗む気になったか？」
今までどんなに貧しくても犯罪だけはしないと決めていたアルの心は少しずつ綻び始めていた。アルは首を縦に振った。
「よし、ふふふ……」
化け物は初めて笑った。地底から響くような不気味な笑い声だった……。

盗まれた心は悪しき闇に沈みゆく　2

アルは病院へ忍び込み、薬を盗んだ。怪物に言われたとおりに行動しただけの事だったが、彼の心はひどく痛んだ。

「俺はなんてことをしてしまったんだ……」

帰り道、アルはひざを崩して悔し涙を流した。その手には薬瓶をがっちりと握りしめていた。

「くそ……」

涙ながらにアルはなんとか歩き始めた。裏通りに差し掛かると、例のごとく怪物は姿を現せた。

「アル、簡単だっただろ？」

「もう俺はこんなことはしない……　俺の前にもう現われないでくれ」

アルは後悔していた。法を犯し、こんなにも心が苦しいとは思ってもいなかったからだ。

「アル、お前はそのうちに気付くはず……　じゃあな、アル」

そう言うと怪物は呆気ないほどすんなりと闇に姿を消していった。

そんな出来事から、月ひとつの時が流れたある日のこと。すっかりレッドのところへ姿を見せなくなったアルを心配してレッドはアルを訪ねた。だがそこにいたのは目が血走った、以前とはまるで別人のアルだった。

「アル、お前、大丈夫か？」

「あ？　今頃来てなんの用だ」

アルの様子を見たレッドの表情は強張った。言葉使いや仕草はおろか、その顔色は青白く生気を感じさせない。近づくレッドをアルは乱暴に手で払いのけた。

「どうしたんだ！　どうしちまったんだ！」

レッドの言葉はアルには届かない。俺に近づかないでくれと言われているような気がして、レッドは渋々帰って行った。

――――――その夜……。

「アル、持って来たぞ……」

怪物はアルの家へ現れた。その奇妙なガチョウの脚には鍵が握られている。もう珍しい光景ではない。アルは怪物にそそのかされ、盗みを何度も行っていた。犯罪行為がアルの心をしだいに破壊していき、やがて顔つきまでも変化させていた。

「ありがとよ」

アルは一言、怪物に礼を言うと、詳しく盗み方を怪物から聞いた。話が終わると、アルはすぐに狙いの屋敷に忍び込み、慣れた手つきで金を盗んでその場を去った。最近、何度も繰り返されてきたアルの犯罪。その帰り道、いつもの裏通りで怪物は姿を現した。

「ひっひっひ……　今日も上手くやったな、アル」

「ああ……」

ふてくされた感じにアルは答えた。最近のアルの言動だった。するとアルはいつもと違う気配に気付いた。怪物の後ろに人影が見えたのだ。その人影はレヴェルだった。レヴェルは、瞬時に怪物の顔面に拳を喰らわせた。怪物のそのロバの鼻先は折れ、キリキリと奇怪な音をたてた。驚き止ったアルだったが、即座に身を反転させて逃げ出した。だが、裏通りを塞ぐ人影がそこにも……。レッドだ。レッドはアルを両手で受け止めた。

「アル！　目を覚ませ！　見ろ！　アレは悪魔だ！！」

レッドは必死にアルに言い聞かせた。アルの目に映る怪物とレヴェル。怪物の様子をアルは目に焼き付けていた。だが、レヴェルは容赦せずに攻撃を続けていた。

「グェーーー！！」

怪物の奇声が通りに響く。奇怪な怪物のそのウサギの尻尾をもぎ取り、ガチョウの脚を引きちぎった。

「キヒィーーー！！」

レヴェルの拳はその後、ぐちゃぐちゃという音を引きずっていった。怪物は原形が分らないまでに破壊され、そして姿を失った。

「事情はあの人に全部聞いたんだ、アル……。まだ間にあう、元のアルに戻ってくれよ」

レッドはアルの耳に囁き続けた。だがアルは目を見開いたままで言葉を失ったままだ。そんな二人に、レヴェルは振り返った。

「強欲に支配される人間は愚かだ。その男が今後どうなっていくかは。レッド、お前しだいかもな……。その男の本当の姿を知っているのは……お前だろ？」

レヴェルはそう言うと闇に姿を消していった……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5063e/

シルエット

2010年10月11日06時23分発行